

令和5年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる  
「プロジェクト型」の共同研究 研究報告書

令和6年5月5日現在

研究課題名	14-17世紀黒海周辺を中心としたユーラシア西部における政治秩序モデルの構築： 自然環境・信仰体制・統治構造				
申請者 (代表者)	氏名		所属機関・職		
	小澤 実		立教大学文学部・教授		
研究構成員		氏名	所属機関・職	専門分野	役割分担
	1	村田 光司	筑波大学図書館情報 メディア系・助教	後期ビザンツ	ビザンツ帝国
	2	藤田 風花	京都府立大学・ 学術補佐	中近世東地中海	東地中海
	3	伊丹 聡一郎	明治大学文学部・ 助手	中世ロシア	ロシア
	4	諫早 庸一	北海道大学スラブ・ ユーラシア研究セン ター・特任准教授	モンゴル帝国・ グローバルヒス トリー	遊牧世界・ イスラーム

### 研究成果の概要

本共同研究では、2回の会合を設け、ディスカッションを行なった。

1回目は、パリ第4大学のモンゴル学者マリ・ファヴロ博士を招聘しての会合である。ファヴロ博士は来日中、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターで二度の報告を行った。初回は、7月4日に開催された主著The Horde: How the Mongols Changed the World(Cambridge MA: Harvard University Press, 2021)を巡るブックトークである。こちらはジョチ・ウルス研究の若手である長嶺博之博士(大山高専)がディスカッサンとなった。なお、このファヴロ博士の主著は、長嶺博士によって日本語に翻訳予定である。2回目は、7月14日と15日に開催された研究センターの夏期シンポジウム「The Phase of Catastrophe: The Crisis of the 14th Century in Afro-Eurasian Context」での報告である。構成員の諫早が企画したこの国際シンポジウムでは、ファヴロ博士が「Mongol Resilience in Times of Crisis」という報告を行う一方、代表者の小澤は第一セッションのコメンテータを務め、構成員の村田、藤田、伊丹はフロアからシンポジウムに参加した。この間、シンポジウム全体の議論を構成員全体が吸収するとともに、休み時間や懇親会を通じて、ディスカッションを行い、研究課題についての理解を深めた。

2回目は、以上の知見をもとに、11月23日と24日に再度研究センターに全員が集合し、今後の研究の展開も踏まえてハンザ史の専門家である柏倉知秀(関東学院大学)を加えることで、ワークショップを開催した。初日が全体に関わる総論、二日目が地域事例に基づく個別事例という構成をとる。初日の最初に、中世から近世への移行期を理解するための出発点として、諫早が、近年の自身の研究を要約するかたちで「中世から近世への移行-「14世紀の危機」は何を変えた

のか」を報告した。その後、国家の枠組みを超えて中世後期から近世にかけての北ヨーロッパの交易で大きな役割を果たしたハンザに関する知識を共有するため、柏倉が「ハンザとは何か」を報告した。翌日、小澤が「連合体制から礫岩（のような）国家へ？ 中近世移行期スカンディナヴィアの政治秩序」として、近年のヒストリオグラフィーを踏まえながら、北欧の状況を整理した。第二報告者の伊丹は「ノヴゴロド共和国による北方辺境支配」というタイトルで、ロシアにおける中近世の境となるノヴゴロド共和国崩壊の前後を踏まえ、当該地域の支配構造を論じた。第三報告者の村田による「13-15世紀ビザンツ領モレアにおける統治空間」は、建築史家との実地調査も踏まえ、文献資料のみではわからない中世後期ビザンツ領モレアがどのように統治されたのかを復元するスリリングな議論を提示した。最終報告者の藤田は、「ヴェネツィア海外領土（Stato da Mar）のギリシア正教徒」という報告において、東方に広がるヴェネツィア海外領土におけるギリシア正教徒の実態を比較的長いスパンで論じ、その経年変化を提示した。

夏期シンポジウムを踏まえた秋のワークショップで了解されたのは、1) 危機から拡大へという伝統的な西洋中近世のヒストリオグラフィーは、ユーラシア全体を視野にいたした気候変動と連関する歴史動態の中で相対化すべきこと、2) 交易活動や宗教付置は、グローバルな問題点となり、国家のような政治的枠組みとは関連しつつも、別個に稼働する要素として検討すべきこと、3) 1) と 2) の要素を踏まえつつ、中世国家から近世国家への移行を位置付け、そこで生じた変化に政治体制がどのように対処するかによって、それを効率的に機能させる統治構造の変化も復元することができる可能性である。以上の検討により、今後も検討に値する論点が多数出ており、共同研究それ自体は継続すべきであろう。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

諫早庸一「14世紀の危機」の語り方—ヨーロッパ到来以前の黒死病『思想』1200（2004）9-32頁（謝辞あり）。

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト（応募中の研究プロジェクトを含む）

2024年度立教大学学術推進特別重点資金（SFR）に「中近世北欧における政治秩序モデルの構築：自然環境・信仰体制・統治構造」を応募中。

[https://www3.rikkyo.ac.jp/research/initiative/aid/interior/SFR/fy24\\_basic/](https://www3.rikkyo.ac.jp/research/initiative/aid/interior/SFR/fy24_basic/)

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。